

## 天声人語

法廷画家という仕事がある。傍聴席で被告の表情をすばやく写し取り、彩色する。新聞やテレビの速報の都合上、10分程度の余裕しかないこともしばしばだ▼佐賀県出身の画家池田学さん(43)は10年の長きにわたって本紙の法廷画を担当した。オウム真理教事件、秋葉原殺傷、新潟少女監禁……。地方での公判も含め、100点を超す絵が紙面を飾った▼「法廷画は究極の短距離走。やり直しはできない。クロッキー(素描)の力を全開させないと務まらない。いい修業になりました」とふりかえる。いまは米国を拠点に活躍する池田さんの作品を集めた個展が、東京・日本橋高島屋で幕を開けた(来月9日まで)▼3年3ヶ月をかけた「誕生」は仰ぎみる大作だ。樹齢数千年の大木が災害で倒れる。荒波を浴びるが、懸命に根を張り、枝を伸ばし、満開の春を取り戻す。「6年前の震災で、文明を押しつぶす津波の力に衝撃を受けた。災害を画題の中心に据えました」▼圧倒されるのは細部の美しさである。人、波、光、葉、虫、鳥、鯨、船、車、家、橋。細い線で丹念に描き込む。はかどつても1日に10ヶ四方進むかどうか。それなのに完成した作品は驚くほど壮大である▼一角には筆者が裁判担当の記者だった頃に依頼した法廷画も展示されていて。法廷で培った短距離の技と力が、長距離の大作で実を結んだかと思うと感慨深い。極小と極大が矛盾なく同居する絵世界を見て回りながら、異世界を遊泳するような感覚を楽しんだ。

2017・9・28